

日英語の語彙的使役構文～非典型例を中心に～

長谷川明香（東京大学言語学研究室博士課程）

本発表は、(1) に代表される日英語の典型的な語彙的使役構文と、(2)-(5)などの非典型的な使役構文との関係を、責任・コントロール可能性・許容使役の観点から論じる。主な考察対象は、有生物を主語とし語彙的な使役動詞を述語とする日本語・英語の構文である。なお、(5) の日本語文は母語話者間で容認性判断に揺れが見られる。

- (1) 典型的な語彙的使役構文：
 - a. 太郎は（暑かったので）窓を開けた。
 - b. John (felt hot and) opened the window.
- (2) 主語が、意図しない結果を引き起こす場合：
 - a. 太郎は（誤って）脚を折ってしまった。
 - b. John broke his leg (accidentally).
- (3) ある人が道具を使い動詞句で表わされた行為を行なっている状況を、道具を主語にして述べる場合：
 - a. この洗剤は頑固な汚れを落とします。
 - b. This key opened the door.
- (4) 主語が、実際の動作主ではなく命令・依頼している人物である場合：
 - a. 聖徳太子が法隆寺を建てた。
 - b. 花子は先週髪を切った。
 - c. The Pharaoh built a pyramid.
 - cf. Mary had her hair cut last week.
- (5) 主語が動詞句の含意する変化を意図しておらず、かつ主語が直接身体を動かしていない（動詞句が含意する変化が主語の働きかけなしに生じているように思われる）場合：

恵子は昨年の震災で学校を焼いてしまった。

本発表では、(2)-(5)のいずれも、目的語に生じる変化が主語のコントロールの範囲内にあるという点で、その主語がその変化に対して究極的な責任を負っていると言えることを主張する。その上で、最後に、「責任」という概念を重視したここまでの分析にとって反例になるような例文（「(私は) 暑くて汗をかいた」「うちの子は、3歳のときに盲腸を切った」等）についても整理・検討し、今後の見通しを示す。